

私の新生活様式

読者の皆さんの生活や仕事はどう変わったのだろう。
変化の中での気付きとは。

やさしい日本語

職場内のミーティングがオンラインも交えて行われるようになった。

最初のうちは雑音がずっと鳴りっぱなしだったが、改良が重ねられた結果、今ではとてもスムーズ・快適に。だが、実際に顔を合わせていれば、その場の空気を感じ取りながら理解できたことが、オンラインでは難しいこともある。例えばやたら長い話。一つひとつの内容が短く区切られていると分かりやすいのだが、「～なので」「～だから」「～だけど」などの接続詞が付いた長い話には、ついていくのに苦勞する。もしかしたら、私自身の発言もそうなっているかも。気をつけよう。 (東京都 N.K.) ■

夫が家出!?

企業のテレワーク化が進んだため、自宅で仕事をする機会が増えた人も多いだろう。電車などの通勤時間が大幅に短縮され、時間を有効活用できるようになったのは良いことだ。しかし、自宅でずっと仕事をしていると、家事の負担増、家族による仕事の中断、オンオフ気持ちの切り替えが難しい、等々のデメリットもあることが分かってきた。



狭いマンション住まいのわが家では、とうとう夫が家を出ていってしまった。近くのレンタルルームを借りて日中仕事をしている。テレワークを行うには、静かで広い

住環境も大切なようである。(埼玉県 M.N.) ■

やっぱり現地・現物

コロナ禍に、こう考えた。マスクをしないと角が立つ。ネットにはフェイクニュースが流される。Zoomのモニター画面は窮屈だ。とにかく今の世は住みにくい……。と、夏目漱石『草枕』の冒頭をもじってみた。草枕は旅の枕詞。

実はこの夏、スペイン旅行を計画していた。ある本を読んで、国立ソフィア王妃芸術センターに展示されているというピカソの『ゲルニカ』を見たくなったのだ。オンライン旅行という手もあるようだが、やはり現地・現物の生の迫力には遠く及ばないだろう。

テレワークの普及など
ウィズコロナも悪いこと



ばかりではないが、大手を振って旅行できないのはつらい。気ままに、できればマスクなしで、旅に出かけられるような状況に早くなりますように。 (神奈川県 J.K.) ■

もっと臨場感を

オンラインの会議やセミナーを利用する機会が増えた。移動時間もなく、遠くの人とつながることができるのは大変便利だ。しかし、私は古い人間のせいか、ディスプレイを通しただけでは臨場感が味わいにくい。出席者の表情や、反応をしっかり読み取るのが難しいこともあり、直接顔を合わせた場の方が好きなのだ。と

はいつでも、コロナは今後も続くため、オンライン会議などは続くであろう。これらの問題を少しでも解決するために、VR(仮想現実)を使用してみたい。技術の進歩は早いため、VR会議・セミナーが一般的になるのは目前かもしれない。

(埼玉県 M.O.) ■

顔が見れるだけでも

友人たちと久しぶりに会った。と言ってもオンラインでだが、10人ほどのメンバーが参加した。年配者もいてZoomは無理ということで、日頃から使い慣れているLINEのビデオ通話を使うことになった。ところが、音声だけの通話やメッセージのやり取りはしていても、ビデオ通話は初めてという人たちばかり。「ミュートに切り替えて」と言っても、「何それ?」「どうやったら?」。結局、誰かが話すたびにノイズがキンキンと鳴り響いて何を言っているのかよく聞き取れない。だが、それでもみんなとても元気そうにしていることが分かった。顔が見れるのはいい。次の月もまた「会う」ことになった。

(東京都 S.S.) ■

体幹トレーニング

1月末ごろから通勤電車では空席があっても座らないようにしている。鉄道会社からは危険だとお叱りを受けそうだが、手すりにも吊り革にもつかまらず揺れに耐えている。いわば体幹トレーニングである。と言うと聞こえはいいが、座れば隣の人と肩が触れるし、顔もすぐ真横。隣の人がコロナ感染者だったらと思うと座れなくなってしまったのだ。

乗車時間は1時間15分と長時間。当初は足がだるく疲れたものの、今



では立つのが当たり前になり、どんなに空いても座ろうとは思わなくなった。コロナ前は、降車駅が終点なのをよいことに爆睡していたのがウソのようだ。要は慣れと習慣なのだろう。コロナ後も運動不足解消の一助に、私なりの“新常态”を続けたいと思う。

(千葉県 N.O.) ■

あえて“沼にハマる”

コロナ禍で外出もままならなかった今年の春は、わが家もネット配信サービスに加入し、室内で多くの娯楽を得ることができた。

中でも世界的に大ヒット中の某韓流ドラマには、家族全員が夢中になった。特に妻は主演俳優のダンディズムに惚れ込み、テレビでの視聴では飽き足らず、サブスクリプション(定額見放題)を利用して、寝室や通勤電車内でスマホによる視聴を繰り返し、その再生回数は十数回に及んでいる。さらに彼の公式ファンクラブに入会し、他のネット配信やオークションを通じて、過去に出演した映画やドラマを網羅するばかりか、コロナ終息後に期待されるファンミーティングや渡航解禁後のロケ地巡りに備えて、韓国語のアプリ学習まで始めた。



このように自分の趣味や好きな分野に徹底的にこだわることを最近では“沼にハマる”と表現するが、今年は全世界の女性が妻と同じく「ヒョンビン沼」に“不時着”してハマってしまったらしい。重苦しい閉塞感が蔓延する世の中にあって、あえて沼にハマることにより、心の癒しや明日への活力を得ることができた。コロナで外出自粛を強いられた結果、こうした新しい沼と出会えたことは望外の喜びであり、今はただ、夫婦で韓国旅行に行ける日が待ち遠しい。

(埼玉県 M.S.) ■